

心の栄養剤 No115 「おおきな木」

米国の作家・シェル・シルヴァスタインが書いたこの物語をご存知でしょうか？それは一人の男が子供から老人になるまでの間、リンゴの木との交流を描いた絵本です。内容は次のようなものです。

一本のリンゴの木が、少年のための遊び場になります。少年は木に登ったり、枝にぶら下がったり、リンゴの実を食べたりします。疲れたときには木陰で昼寝をしました。少年は木が好きで、木も嬉しく思っていました。時は流れて、少年は遊びに来なくなります。

ところが、ある日、成長した少年が木の前に現れます。木は以前のように遊ぶことを勧めますが、少年は、もうそんなことはできないと答えます。それよりも買い物がしたいので、「お金がほしい」と言います。木はお金を持っていないから、「私のリンゴをもぎとって、まちで売ったらどうだろう」と提案します。少年はリンゴの実すべて持っていきます。木はそれで嬉しかったのです。

また、長い間、木は一人でした。

ある日、現れた少年はもう大人になっていました。以前のように遊ぶことを勧める木ですが男は「ぼくに家をくれるかい」と言います。木は「私の枝を切り、家をたてることはできるはず」と言います。男は枝をすべてきって持ち去ります。それでも木は嬉しく思います。

また長い間木は一人です。

再び、年をとった男が現れて、木に向かって「どこか遠くへゆきたい、お前、船をくれるかい」と言います。木は「私の幹を切り倒して、船をお作り」と言います。そして男は幹を切り倒して船を作って行ってしまいました。

長い年月が経ち、男は木のところに帰ってきました。切り株になってしまった木は何もあげられないことを謝ります。男は「わしは今たいして欲しい物はない。座って休む静かな場所がありさえすれば。わしはもう疲れ果てた」

と言います。木は「この古ぼけた切り株が、腰掛けて休むのに一番いい・・・。腰かけて、休みなさい」と語り掛けます。

男はその言葉に従って切り株の上に腰掛ます。木は嬉しかったと言い、物語はそこで終わります。



先日、この「おおきな木」についての論評が載っている文章を目にして・・・

「あ～これ昔、『心の栄養剤』で取り上げたな～」と懐かしく～10年前の心の栄養剤を引っ張り出してみました！！

その頃は、まだ息子達は二人とも学生で、まさに自分を木に置き換えて

「与えて～与えて～与える無償の愛は素晴らしい」というような事を私は書いていたのですが・・・今読み返すと・・・

「本当に木は嬉しかったのかなあ」

「与え続ける行為で、たくましく立派な人が育つのかなあ」という感想を持ちました。いい本は、その時の気持ちや立場、年齢などで受け止め方が違うんだろうと思います。

私の子育てを振り返っての反省としては、子供達に「厳しさ」「辛抱」などを親として教えられなかった、という事になるような気がします。厳しさと優しさ、与え方、与える意味、またこの絵本にいろいろ考えさせられました！！

何にしても、くすりのキュートがお客様がゆっくり休める「切り株」のような存在となれるよう頑張りたいと思います。

